

## 石巻からの報告

警察医の見た  
検死現場と津波被害

医師 石巻在住  
佐藤 保生 Yasuo Satoh



私は昨年四月に在宅医療専門の診療所を開設した。八月に警察医にもなった。その結果、今回の津波により私は

診療所の立て直しに加えて検案業務（死因を特定し死亡診断書を書くこと）という重責を担うことになった。生きている人の診療が医師の第一義的任務であるが、亡くなった人を家族にお返しし、用っていたたくことも重要な務

めである。そのような視点から津波後に見聞きしたことを書き記す。

## 避難所が遺体安置所に

私の診療所は海から2キロほどのところにあつた。安全地帯のはずであったが、突然黒い水が押し寄せ大慌てで隣のマンションに逃げた。「南浜町が

燃えてる」という話を聞いても、隣接した地域にある自分の実家まで燃えているとは思わなかった。翌日診療所を見ると床上八十センチ程水が入り、ヘドロに覆われ本や家具が散乱し入る気にもなれなかった。その足で母と兄夫婦を探しに山の避難所に行った。最初に行つた避難所は急遽遺体安置所が変わっていた。警察の人に「先生良

く来てくれました。検案お願いします」と言われた。「まず肉親の安否確認に行つてきます。夕方きます」と言つて他の避難所に向かった。途中で知り合いに兄が二階から助けを求めていたと言われた。四カ所避難所を回つたが母も兄夫婦も見つからず、名簿にも



4月11日、石巻市の遺体安置所の光景（EPA=時事）

載つていなかった。メッセージも避難所に来た形跡もなかった。暗澹たる思いで遺体安置所に向かった。遺体安置所である市の総合体育館にはすでに十体ほどの遺体があつた。新たな遺体が到着すると、警察の人たちがエネルギーッシュに検案にとりかかった。私は家族が運ばれてきたらどうしようと思いつながら遺体を診たり検案書を書いたりしていた。体育館は寒く震えながら書いていた。警察官がカイロをくれた。原発事故のニュースが皆の心を暗くしていた。私はヘドロに覆われた真っ黒な夜のメインストリートを酷いぬかるみに足をとられながら帰って行った。「死の町だ」と思った。

翌々日の三月十三日には妻に安否確認を依頼し検案業務を行なった。その夜兄夫婦が訪ねてきた。

泣いた。母も無事だった。兄の生還は劇的だった。周囲が燃える中、二階

まで水につかつた自宅で一夜を過ごし、明け方水を掻い潜り、崖を上って高地にたどり着いたという。後顧の憂いから解放され検案も軌道に乗り出した。兄も警察医だったので、手分けして検案を行った。東京方面から応援医師も駆け付けた。一週間程して体育館では手狭になり検案の場は旧青果市場に移った。警視庁からの応援部隊や大学からの応援医師が入り大規模になつてきた。私は災害死の検案を離れ、一般の検案を担当することになった。遺族の家や警察署で検案を行なった。津波の影響で一般の検案も増えた。自殺も多くなつた。

## 警察官たちの奮闘

警察の人たちの奮闘は驚嘆に値した。長期間警察署に泊まり込んでいた。髭ぼうぼうであった。多かれ少なかれ皆

被災していた。家族を亡くした人もいと聞いた。体育館で検死をしていると毎日、昼食にパンが二個でた。「かみさんに一個持つていく」と言っていた警官もいた。三月の下旬には長男と次男が診療所の復旧のために駆け付けた。何か必要かと聞かれたので「ビールで宴会しよう」と応えた。「それから警察に届けたいので、お菓子を買ってきてほしい」と言った。夜長男と二人でカステラを届けた。部屋に入ると「こんばんは」「おぼんです」と一斉に声がかかった。長男はすごい緊張感だと感じ入っていた。

一般検案に回った後も時々は災害死と思われる遺体をみた。内臓と大腿部の肉が無くなっていて遺体もみた。「カモメに食われたんですよ。ここにカモメの糞がついています。やつらは柔らかいとところが好きなんですよ」一カ月たつと遺体の傷みも激しくなってきた。

この手紙のコピーを隊員は胸のポケットに入れて働いているという。

被災はつらいことだが、いいことも多くあった。親族や友人が懸命に私たちの消息を調べたことを後で知り恐縮した。四十年前程前の学生時代に付き合っていた方から感動的な手紙をいただいた。臨海鉄道で働いている方だった。「今、私の鉄道から北に向けて石油を満載にした貨物列車が毎日発車してゆきます。少しでも被災地の皆様の支えになればと、現場に立っています」この一節には涙がでた。私はこの手紙のコピーを警察にも届けた。

在宅医療は患者さんのお宅で行なわれるため、診療所の復旧前でも実施できる。車さえ手に入れば往診はできる。三月二十日には廃車寸前の車を借りることができた。翌日には「在宅医療に使ってください」と知人の息子さんが名古屋から持ってきたガンリンを二十

頭のない遺体も診た。二カ月過ぎた今も遺体の搜索と検案は毎日行われていく。顔では判別できない時は、歯の治療歴やDNA鑑定により決めている。五月十八日に私の診療所に来た若い警官に、私が友人に書いた手紙を見せた。その中に警察の人々の頑張りを述べた部分があったからだ。その警官は突然泣き出した。帰る時にこう述べた。「先生がこのような気持ちでおられるのでしたら、私たちががんばります」彼らがいかに辛い仕事をしているのかが分かり緊張を覚えた。

警察の人たちのすごいところは手を抜かないことだ。非常時だから少しぐらい省いてもいいのではと思うが、彼らはきちんと決められた通りに行なった。多忙をものともせず、問題のあるケースは大学に司法解剖を依頼していた。

どうして懸命に遺体搜索をし、人物

リットル分けてくださった。これに力を得て翌日の三月二十二日初往診を行った。三月二十八日に施設に往診したところ、往診車を満タンにしてくれた。「私たち、先生のような人がいるととても助かります」私たちの医療を支持してくださる人たちを、このような形で知ることができようとは被災するまで考えたこともなかった。

石巻では医療崩壊のきざしは震災前からあった。私は今年の年賀状に開業のテーマは「守り」だと書いた。医療崩壊から地域を守る、中国の侵略から我が国を守る、この2点を胸に秘めて診療をしていると書いた。しかし予想もしない大波がやってきた。医療崩壊は必至だ。当地の基幹病院であった石巻市立病院は壊滅状態である。開業医も多数被災した。在宅医療のニーズは高まるのに、担い手は減る。医師の意識改革が必要になる。平時の発想を捨

を同定し遺族に引き渡すのだろうと考えさせられた。結局は人を大切にすることだと愚考した。テレビである老人がこう言っていた。

「早く見つけて、成仏させてあげなければ」

### 日本を守るものたち

自衛隊の活躍はマスコミでもかなり報道されている。優しさが印象的だった。給水車に水をもらいに行くと「何杯でもいいですよ」とにこやかだった。ベッドが出せなくて困っていた家族が頼みに行くと、数人でやってきて簡単にだしてくれたそう。石巻市の大川小学校では7割の生徒が亡くなった。生き残った同校の女児から「日本をたすけてください。いつもおうえんしています。じえいたいさんありがとう」と等と書かれた一枚の便箋が届けられた。

て、死にもの狂いにならなければならぬ。被災を通して、誰か日本を守るのかが見えてきた。戦後の焼野原から復興を勝ち取った主力部隊は団塊の世代の親たちだった。今度は私たち団塊の世代も立ち上がらなければならぬ。若い世代が健全に育っているのがうれしい。各世代が協力し英知をしばれば日本は蘇る。

津波のため警察の恒例の人事異動は延期された。二カ月経て、一番苦しいところを乗り切った上で異動が実施された。石巻を守ったあの勇士たちも少なからず去った。守ることの価値を人々に示して……。

さとうやすお  
1948年生まれ。東北大学医学部卒。釜石市立病院と石巻市立病院に在宅医療科を創設。2010年、在宅医療専門の診療所を開設。著書に「ふるさと」の病院」在宅医療科の詩」など。